

2024年8月 25 日 聖霊降臨節 第 15 主日礼拝メッセージ

「酒に酔い『痴れ』るな」

水谷憲牧師

聖書 エフェソの信徒への手紙 5 章 11-20 節

先々週、私は法事のために九州へ帰っておりました。というのも、昨年私の弟が突然亡くなりまして、その 1 周忌の法要と納骨があったためです。残念ながら、私はこちらでも急に葬儀が入ってしまったもので、弟の法事には出られなかったのですが、翌日の納骨だけでも、と急いで九州へ向かい、こちらはこちらで日曜日の礼拝があったものですから、一泊してからまたこちらへ戻って参りました。納骨を終えた日の晩、親族で久しぶりに集まって会食をしました。仲のよかった従兄弟たちやその家族とも 10 年ぶりくらいに再会し、楽しく食事をして参りました。若い頃でしたら、お互いに徹底的に酒を飲み明かしてどんちゃん騒ぎをし、時にはケンカになったりした挙句、翌日二日酔いで痛む頭で帰り道を急ぐ、といった感じでしたが、もういい加減いい大人になって、酔っ払って物を壊したりケンカになったりすることもなく、穏やかに帰ってくることができました。思えば、酒を飲んで荒れていた頃というのは、やはり私自身が自分の中で何かモヤモヤしたもの、言いようのない悩みや不満があったからだったのかもしれない、その意味では、もちろん今だって悩みがないことはないけれども、でも随分自分自身若い頃に比べたら落ち着いてきたのだろうなあと感じているところです。最近は誰かとお酒を飲むのも久しぶりだったので、改めてそんなことを思わされたのでした。

さて「キリスト者」、すなわち「クリスチャン」とは、どういった人々のことを言うのでしょうか。一般的に「キリスト者」とは「イエス・キリストを救い主であると告白し、洗礼を受けた人」のことを指すわけで、そこには「善良な人、穏やかな人、怒らない人、清く正しく美しい人」のような、勝手に作り上げられてきたイメージがくっついているように思います。中には「お酒なんか飲まない人」とか「肉食をしない人」みたいな、間違ったイメージまで持たれているようですが、しかし私たちは現実的に、洗礼を受けてクリスチャンになったからといって、何かめざましく善良な人間に生まれ変わることができたとか、清く正しい人物に自動的に変えられたとか、人生がうまくいくようになったなどということはほとんどないわけです。「イエス様に従って新しい命に生まれ変わらせて頂くだ!」と決意して洗礼を受けたとしても、やっぱり面倒くさがりな自分・いらちな自分・あきらめの早い自分・無意識に不平不満を

垂らしてしまう自分・何かと自分を正当化して責任を周りのせいにしたがる自分…そういう醜い自分、自分で認めたくない自分というものは、なかなか消え去ってしまわないものです。私だけでしょうか。もうすでに洗礼を受けておられるみなさんはどうでしょうか。しかし、いずれにせよ思うのは、もしも本当にキリスト者になるだけ、洗礼を受けるだけで善い人間になれるのならば、ナチス・ドイツだって大量虐殺なんてしなかったはずだし、アメリカ人も原爆を落としたりあちこち出かけて行って戦争なんかしないでしょ。ロシアもウクライナもキリスト教国ですよ、ということでしょうかね。キリストの名によって教会に集う、ごくごく平凡で善良な一市民であるこの私たちだって、日常の中では相変わらず自分の事ばかり中心で、他人に腹を立て、実際に傷つけてしまったり、人を肯定して受け入れることができなかつたり、あるいは自分という存在さえも否定的にネガティブにとらえてしまったり…神様の喜ばれる業とは反対のことばかりしてしまっているかもしれません。

この「エフェソの信徒への手紙」の一つの大きなテーマは、「キリスト者としてのふさわしい実践」、つまり、「キリスト者として望ましい姿」というものです。この手紙の著者、すなわちパウロは5章8節において「あなた方は今や主に結ばれて光となっているのだ、だから光の子として歩みなさい」と言っています。確かに神様が私たちのことを、私たちがどんなにしょもない者であっても、神様にとっての光り輝く宝物として愛して下さっているのは本当のことでしょう。それは聖書のどこを読んでも何となく伝わってきます。しかしその一方で、神様の御心とは全然反対のことをしてしまっている私たちの一面、神様の愛を仇で返してしまっている私たちの一面というものも現実にあるわけです。実際11節においては「実を結ばない暗闇の業に加わらないで、むしろ、それを明るみに出さなさい」と書いてあります。つまり、キリスト者であるにもかかわらず、実を結ばない暗闇の業に加わっている者が、当時のこの手紙の読者の中にもいたということなんです。キリスト者でありながら、生産的でなく、後ろ向きな、内向きな者がこの当時もいたということなんです。それは例えば、5章4節にあるような「卑わいな言葉や愚かな話、下品な冗談」を好むと言ったことだけではなく、何かに対して不安を感じるあまりに現実逃避をしたり、仕事や対人関係を避けるようになったり、何かやり場のない怒りのために自分や他人、あるいは世間に対して攻撃的になったり、落ち込んで閉じこもったり、自分のことをまるで価値の無い者だと思ったり、そこから逃げるために酒に酔いしれて現実逃避をしたり…自分でも、こんなことしても何の解決にもならないし、神

様も喜ばんとわかっているけれどもどうしようもない、そういう事柄はこの手紙の読者だけではなく、私たちにもいろいろ憶えのあることかもしれません。そして「それを明るみに出す」とは、そんな生産的でないうじうじとして、じめじめとした思いを抱え込んで増幅させて、ついに爆発させてしまったりする前に、「それを明るみに出せ、友よ、神の光輝く宝物よ、後ろ向きでじめじめした思いにとられることは誰でもある、口にすることは確かに恥ずかしいけれども悩むこと自体は悪いことではない、それをひそかに抱え込み、ふくらませ、ついに最悪のかたちで白日の下にさらされる前に、それを自分から勇気をもって神の前にさらけ出し、祈りつつすべてゆだねよ」と、ここでパウロは私たちに勧めているというわけです。私たちはキリスト者でありながら、じめじめした悩みやストレスを誰にも言わずに自分一人で抱え込んでしまって、神様にお話する、神様に祈り委ねるということを忘れてしまっているのかもしれません。

また、「明るみに出す」とは、もう一つ「指摘してやる」という意味でもあります。それは、私たちが隣人の抱える悩みについて、暗闇に一人で抱え込まないように神様の前に促すことです。時にはその痛みに寄り添い、共に祈ることも必要でしょう。私たちはそれぞれ、様々な悩みを抱えているはずですが、たとえそれが生産的でない、仮に後ろ向きでじめじめしたもの、人に対しては口にすることも恥ずかしいものであったとしても、神様だけはそんな悩みをも、黙って受け止めて下さるということを改めてお互いに確認できたと思います。神様だけは、私たちのどんな悩みや告白に対しても「そんなものは大した悩みではない」とか「しょーもない、そんなもの考えすぎだ」などとは決して言われません。隣人の悩みを黙って受け止めることができず、そんな言葉をあれやこれやとついつい口にしてしまいがちな私たちも、改めてそんな神様の姿に倣って、黙って寄り添い、共に神様に祈る者とされたいと思います。14節にはこうあります。「明らかにされるものはみな、光となるのです」。神様は私たちが痛む心を持ってさらけ出したものはみな、それがどんな悩みであろうとも受け止め、光に変えて下さるというのです。

光とは、神様や永遠の命を示す言葉でもあります。私たちにとってしんどい悩みも、神様の前に提出された時、それは私たちを永遠の命、新しいのちに導く光へと変えられるのです。私たちも、過去に悩み苦しんだ経験が、現在の私たちの糧になっているということは少なからずあるのではないのでしょうか。ですから、神様が私たちの抱える悩みを、輝かしい光へときっと転換して下さることを私たちは信じて、

そのすべてを神様に委ね、祈ってゆくことが私たちの目指す信仰の姿であると言えるのかもしれませんが。

「眠りにについている者、起きよ。死者の中から立ち上がれ。そうすれば、キリストはあなたを照らされる」と続きには書いてありますが、「眠りにについている者」とは、光を避けて暗闇に留まっている者のことなのかもしれません。神の愛が分かっているながら背を向け、まさに死者の仲間入りをしてしまっている者です。そしてこの言葉はきっと、そのような状況に陥ってしまっている者に対する招きの言葉なのです。「起きよ、立ち上がれ。キリストがあなたを照らし、あなたをきっと死の苦しみからいのちの喜びへと救い上げて下さるのだ」と。

初めにお話ししたように、イエスをキリストとして信じると告白したキリスト者であっても、日々の歩みにおいては神様の御心から外れることが多いのが現実です。同じように、キリスト者だからといって、何の悩みもなく日々を歩んでいる人はほとんどいないでしょう。キリスト者であろうと悩みや惑いはあるし、非生産的で後ろ向きになることだってある。それはそれで全くかまわないのですが、しかしそんな時にただより頼んでいく対象としての神様が自分のそばにいるかどうか。クリスチャンになったところで簡単に生まれ変わるわけではなく、簡単に悩み苦しみから解放されるわけではない。クリスチャンになるということは、主イエスの生き方に倣う者として、イエスに従って生きることを決意するということです。ですからそこには、ただキリストにすがってゆく姿勢、ただ神様により頼む姿勢というものが、本来あるはずなんです。本来ないとおかしいんです。

自分にとって、とても抱えきれないしんどい問題について、誰にも打ち明けられず、ストレスを自分の中に溜め込み、あるいは他人に向けることによって「実を結ばない暗闇の業」に加わるのではなく、祈りを持って神様の前に自分の思いを明らかにすることから始めていきたいものだと思います。神様はきっとその思いを汲み取り、逃れの道を備え、私たちの重荷を永遠の命の喜びへと導く輝かしい光へと変えて下さるのだということを、強く信じていきたいものだと思います。

パウロは「酒に酔いしれてはいけません」と言っています。「酔いしれる」の「し」は「痴」と書きます。「痴漢」の痴、「愚痴」の痴です。「愚か・ばか」という意味です。「ばかになるほどに酔っ払うな」ということです。酒は飲んでもよい。飲んでもよいけど、ばかになるほど飲んでしまうようなら、飲まずにおれないようなら、身を持ち崩す前にいっそのことやめてしまった方がいい。お酒は楽しく、ほどほどに。